

科目区分：学校教育実践コース（音楽教育専修）及び音楽文化コース
 授業科目名：歌唱研究演習
 担当教員：木村勢津

歌唱研究演習 - Recitativo と Scena の歌唱法 -

音楽教育教育講座・木村 勢津

1. 授業の目的

前期の歌唱研究で学んだイタリアオペラの外観を踏まえ、演習を行うオペラ作品の特徴を理解し、言葉と音楽の関わりを歌唱演習により体感すること、また、Recitativo レチタティーヴォと Scena シェーナの違いを正しく理解し、演奏できる技巧と豊かな表現力を養うことを目的とした。

2. 授業の概要

歌唱研究演習 は、音楽文化コース 3、4 年生、学校教育教員養成課程音楽専修の 4 年生の合同授業で、声楽専攻生 3 年生 2 名、ピアノ専攻生 2 名、4 年生の声楽専攻生 2 名の計 6 名で行われた。

本授業では、言葉と音楽の関係について、オペラの中核を成すアリアや重唱からアプローチでなく、劇の進行に大きく関わり、オペラにおける言葉の役割が顕著であるレチタティーヴォ及びシェーナという側面から考究するものであり、言葉自体が所有するリズム・抑揚・語感と音楽の様々な要素との関係を考え、的確に歌唱表現できるよう以下順番で授業を展開した。

- 1) 選択楽曲のディクシオン
- 2) 演奏者による日本語の台本作成とその読み合わせ
- 3) イタリア語の台本読み合わせ
- 4) ピアノ伴奏による原語歌唱

歌唱演習の題材として、18 世紀のオペラの Recitativo secco レチタティーヴォ・セッコ、および 19 世紀のオペラよりシェーナを取り上げた。両者の歌唱比較を行い、台本（言葉）や音楽の違いを体感し、その歌唱技法を演習を通して習得させた。

6 名の受講生の内、1 名は伴奏を希望したため、5 名の受講生により 5 演目を設定した。演習題目と役柄は次に示すとおりあ

る。

- 1) W.A.Mozart
Dall'Opera"Le nozze di Figaro"
Ricitativo:Va là vecchia pedante
(Susanna e Cherubino)
- 2) W.A.Mozart
Dall'Opera"Così fan tutte"
Ricitativo:Andate là
(Fiordiligi, Dorabella e Despina)
- 3) D. Cimarosa
Dall'Opera"Il Matorimonio segreto"
Ricitativo:Lisinga, no, non c'è
(Carolina e paolino)
- 4) D. Cimarosa
Dall'Opera"Il Matorimonio segreto"
Ricitativo:Vanne, vanne, la seguita
(Carolina e paolino)
- 5) G.Verdi
Dall'opera"La Traviata"
Scena:Oh qual pallor! ~ Ah! si, da un anno
(Violetta e Alfredo)

3. 授業への参加および時間外学習状況

受講者数は 6 名で、全授業の出席率平均は 94%であった。

欠席回数	0回	1回	2回	3回	出席率平均
人数(6名)	3名	2名	0名	1名	94%

また、授業時間外の 1 週間の平均学習時間は、1 時間 40 分であった。

時間	0.5H	1H	1.5H	2H	3H	平均
人数(6名)	1名	1名	1名	2名	1名	1時間 40分

4. 授業進行上の工夫

イタリア語は、本学では未習外国語として開講されていないが、オペラの歌唱においては、重要な外国語のひとつである。レ

原語による歌唱に際しては、語学に精通することは言わずもがなであるが、レチタティーヴォの歌唱においては、正確な発音や適切な発音速度は、芸術的歌唱の礎となる。さらに、単語の意味に理解する域に留まらず、台本の行間を読み取り、歌唱者自身の言葉として置き換えられる能力は、芸術的歌唱に繋がるものと、授業者は考えている。

声楽専攻生が、アリアや重唱を学習するにあたり、その過程において、イタリア語の音読の徹底は、常日頃から心がけているが、学習者の独学では、正確な発音や発音速度の判定には限界があり、音楽的な原語とされるイタリア語の特性が生かされたディクションは難しく、その音楽表現には困難を伴っているのが実態がある。

本授業では、受講者に自らの言葉として、イタリア語の台本を日本語に置き換える作業を行い、日本語の台本作りを授業スケジュールに組み込んだ。イタリア語の読み合わせの前にこの日本語の台本による読み合わせを配した。このことにより、既成の対訳的台本ではなく自らの言葉で語ることの意義を考え、言葉が感情の発露として扱われることを自覚し、役柄に成りきる演奏とは言葉が自然に発せられることが基本となることの体験を重ねさせたいと考えた。

授業は2学年合同で行われ、また声楽専以外の学生も受講しているため、イタリア語の習熟度には大きな差が生じていた。この点を考慮し、レチタティーヴォの歌唱を初めて体験する受講生は、4年生と組ませたり、シラバスに記載した内容およびスケジュールを一部変更して、言葉への理解を基軸に授業を展開するよう努めた。

シラバスの主な変更点は、以下の3点である。また、授業内容の変更に関しては、受講生の構成により変更を行うことがある旨、予めシラバスに記載しておいた。

- 受講生による日本語の台詞作成と読み合わせの追加
- イタリア語の読み合わせの時間追加
- 演出を伴う演技項目の削除

3年生はレチタティーヴォ・セッコの演習を中心に、4年生は、3年生の課題に加えシェーナを必修とした。

1人当たりの演習目標曲数は、3年生の

声楽専攻生は2曲、声楽専攻生以外の受講生は1曲、4年生の声楽専攻生は3曲を必修とした。

また、ピアノ伴奏のみによる参加も認め全曲の伴奏を行うことを条件とした。

5. 授業に関するアンケート結果

アンケートは14回の授業および歌唱試験終了後に実施した。

各項目を4段階評価とし、殆どのアンケート項目に自由記述欄を設定し、評価の目安を知る手掛かりとした。

項目によっては、全員の受講生から回答を得られなかった項目もある。

(1) テーマ設定と授業内容の一致について
 テーマの設定と学びたい内容が一致していたかについて設問した。

一致する	+2	+1	-1	-2	一致しない
人数(5名)	3	2	0	0	

アリアや重唱を中心に学んでいる声楽専攻生は、レチタティーヴォを学ぶ機会を望んでいた。

(2) 日本語による読み合わせ演習

日本語による読み合わせは、シラバスに掲載していなかったが、この演習を受講生がどのように捉えていたか、また、その成果について問うてみた。

役だった	+2	+1	-1	-2	役立たない
人数(6名)	6	0	0	0	

< 自由記述欄 >

感情の変化や間の取り方がわかりやすくなった。

息遣いや間の取り方をどのようにすればいいかという助けとなった。

ソロを行う場合にも通じると感じた。

母国語で読み合わせをすることで、イタリア語になった時に、感情の入れ方やテンポ感がつかみやすかった。

受講者全員が役立ったと評価し、イタリア語歌唱による表現法の礎となったと言える。

(3) イタリア語による読み合わせ演習

音楽合わせを行う前段階として、ディク

ション演習と読み合わせに重きを置いて授業を行った。

役だった	+2	+1	-1	-2	役立たない
人数(6名)	5	1	0	0	

<自由記述欄>

先読みする練習になった。

歌に入るとき、スラスラと歌いやすかった。

辞書を引くだけでは、正しい発音を身につけたり、言葉のスピード、語感等を表現することが難しいと思った。

(4)授業の進度および時間配分

授業の進度

適切である	+2	+1	-1	-2	適切でない
人数(5名)	3	2	0	0	

授業の時間配分

適切である	+2	+1	-1	-2	適切でない
人数(5名)	2	3	0	0	

初回授業(ガイダンスと曲決め)と最終回の試験を除く13回の授業について、進捗の満足度および各グループの演習発表回数については、ほぼ全員が満足しているが、楽曲の難易度と習熟度により演習時間を傾斜配分したこともあり、演習時間の等分を望む声が「+1 = まあ適切である」と回答を産み出したものであろうと推察する。

(5)異学年、専攻生と専攻外の学生の授業構成について

満足	+2	+1	-1	-2	不満
人数(6名)	4	2	0	0	

授業開始前に授業者が危惧していた習熟度の違いに対する不満は見られなかった。

次に自由記述形式での設問について述べる。

(6)自主学習中に困ったこと

資料が少なかったこと。

自分のやっていることと相手との差。

言葉を意識するとリズムが崩れてしまう。

については、演習課題のうち、モーツァルトとヴェルディに関しては、比較的日本語の資料も豊富で、入手が容易であるが、チマローザの「秘密の結婚 Il matrimonio segreto」に関しては、若干の映像資料はあるものの、作品に関する資料や対訳資料が乏しく、受講者による日本語台本作成に困難を生じたことを述べているもので、台本作成に当たっては、授業者が支援を行った。

に関しては、語学ならびに歌唱の習熟度の個人差と考えられる。

(7)専門性を高めるために役立ったと思うこと

言葉が重要だということが再確認できた。

言語の大切さが改めてわかった。

言葉を明確に歌うための練習方法が分かった。

言葉をどう伝えるかを学べた。

練習方法や演奏方法など、レチタティーヴォだけに的をしぼって教えてくれたので、本当にためになった。

イタリア語と演技

息(プレス)の仕方で表現が広がることが実感できた。

歌の伴奏をしたことがなかつたのでとても良い勉強になった。

のイタリア語と演技という回答は、本授業では、演出を伴った演技を行わなかったため、身体を使った演技を指すものではなく、声で演技を行うことを指しているものと推察できる。

(8)授業で良かった点

少人数で積極的に授業に参加できた。

色々な人と歌える機会になった。

授業の雰囲気張り詰めていなかったのが良かった。

日本語に読み合わせ、イタリア語の読み合わせがあったこと。

日本語およびイタリア語の読み合わせが授業の成果として認められた。また、個別指導の緊張に比して、グループによる音楽作りのため、適度に緊張感が解けた状態で授業が行えたものと推察する。

(9)改善点

シラバス通りに2曲、3曲したかったが、実際にやってみると、シラバス通りに進むことができなかった。

自分たちが改善しなければならない点として、もっと授業を生かせるような練習や合わせをしなければならなかった。

授業者に対する改善点の指摘というよりは、受講者自身の反省点として、この設問を捉え、記述されている。

(10)今後取りあげて欲しいテーマ

シェーナについてもっとやってもらいたい。

アリアの歌唱、重唱

ドイツ、フランスオペラ

音楽を分析したうえでの歌唱演習

声楽専攻生は、歌曲や日本の作曲家の作品よりもオペラへの思考が強い傾向が認められる。今回は、学年間における習熟度の差が顕著に認められたため、学生の要望を受けて、シェーナの演習は4年生のみの課題と変更した。3年生にとっては、シェーナへの学習意欲をかき立てたことになったものと推察する。

6. 今後の課題

授業を終え、更にはアンケートの結果から下記の改善点を見い出した。

(1)声種の偏りへの対応

本授業では受講生の声種に偏りがあり、演習できる楽曲に制限が加えられた。多人数が出演するレチタティーヴォ・セッコやシェーナの演習が行えなかったり、バリトンやバスの役柄を得ることができず、偏った選曲となった。

今後の課題として、声楽専攻生以外の受講生の拡充やTAの導入等で対応が挙げられる。

(2)自主学習の内容精査と練習時間の増大

レチタティーヴォは複数の登場人物で構成されることが多いが、共演者の言葉や音楽に自然に呼応できるためには、正確な発音、発声の定着のみならず、母国語同様に聴き取れる訓練が必要である。自主学習の

時間の使い方について、音取りや発声を中核として費やす考え方から、朗読や読み合わせに重点をおいた学習方法への意識の転換を図る指導の充実と1週間の学習時間を偏りなく配分することの指導の充実が課題となった。

(3)伴奏楽器とピアノによる演奏の留意点

伴奏は歌唱を支える重要な演奏パートナーである。

レチタティーヴォ・セッコの伴奏楽器チェンバロについては、その奏法と読譜方法の留意点、また同様にシェーナにおけるオーケストラの役割とピアノで演奏する場合の留意点についての指導は充分とは言えず、ピアニストとして、ある意味、歌唱者以上に原語に精通し、息を読む演奏を心がけて欲しいものであるが、歌唱に関する指導で手一杯となり、ピアノで受講した学生の指導時間の確保と内容の充実が今後の大きな課題となった。